

博物館における防虫徹法の動向

園田直子 神庭信幸

はじめに

1 防虫徹法の現状

2 害虫駆除方法の将来と可能性

まとめ

論文要旨

博物館における防虫徹法では、材質あるいは人間に対する薬剤の影響に最大の関心が寄せられてきたが、自然環境保全への世論が高まっている今日、環境への影響も重要な課題になってきている。そこで本論では、特に薬剤のオゾン層破壊問題を契機として、博物館における防虫徹法を見直し、今後の可能性を導きだすための基礎調査をおこなった。一般的に使用されている薬剤、とくに燻蒸剤（酸化エチレン、臭化メチル、フッ化スルフリル）の材質・人体への影響とともに、オゾン層破壊問題を検討してみると、これらの薬剤も問題を含んでいることが分る。従来の燻蒸剤にとって替る方法あるいは薬剤がすぐに見つかるということはないが、低酸素濃度による殺虫・殺菌法やビレスロイド系殺虫剤の開発など今後期待できる可能性も現われ始めている。今後の文化財における防虫徹法を考えると、必ずしもすべての資料を燻蒸などで一様に処理するのではなく、個々の状況に合せて、資料に害が及ばないような環境を整備するという、より柔軟性に富んだ対処方法の検討が必要となるであろう。